

平成21年度市政だより10月号より

# 横井小楠

—その業績と生涯—



幕末になると各地で、有名な学者や教育者が開いた「私塾」が急に増えました。兄の家に居候の身であった横井小楠も『小楠堂』や『四時軒』\*という塾を開きます。「銀杏城下の寒士(貧乏な男)の家に、生命の灯が燃えはじめた」と語られる小楠の塾で、小楠は塾生にどのようなことを学ばせたのでしょうか。

## 6 私塾「小楠堂」を開く

天保14年(1843)、小楠は雨戸はなく壁もぼろぼろの水道丁の自宅の一室(6畳の間)で私塾を開きました。小楠の塾は、初めて学問をする人のための塾ではなく、現在の大学のようなものでした。最初の入門者は徳富一敬や矢島直方など地方の郷土\*の子で、後には肥後藩士や他藩の藩士も入門するようになり、塾生は次々に増え、6畳の間では狭くなっていました。

弘化3年(1846)、藩の役所に勤めていた小楠の兄時明が昇進し、横井家は相撲丁(現在の下通1丁目)に転居しました。新居での小楠の塾は2倍の広さになり、翌年には、敷地内に塾を新築して『小楠堂』と名付け、20余名の塾生が寄宿しました。『小楠堂』には小楠直筆の掲げられましたが、酒失に対する自戒(自分への注意)でどうか、最後に「酒禁制(酒の禁止)の事」も加えられています。

さて、小楠は「学問」について「自分の心を日々活用すること(心の修行)\*」と言っています。そして、「古人(昔のすぐれた人)は、書物に頼ることなく、自分に眞わっている能力を十分發揮して、毎日の生活の物事に心を配り、工夫した。例えば、親子兄弟はもちろん、多くの人と交わり、農民などとも親しく語り合ったりした。また、自然や動植物についても実際の場で理解することに努めた。その後に、見聞きした事を確かめるために、関係の書物を読み、自分の実際の経

験や物事の仕組みなどに限りがないことに気付き、さらに勉学に励んだ。これが眞の学問である。」と解説しています。

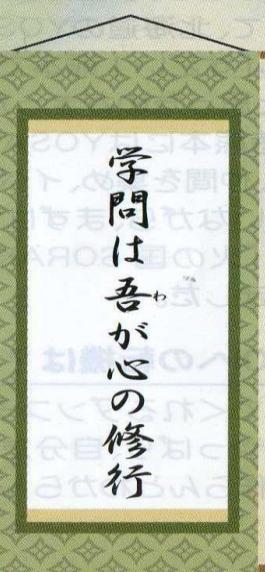
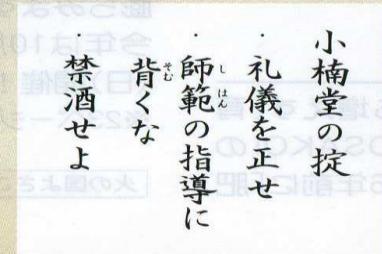
小楠は塾生に対して、「書物の上だけで物事を理解するのではなく、古人の学んだやり方を学ぶ眞の学問をするように」と、励ました。小楠の塾生に対する教育的態度は厳格でしたが、一方では、身分・年齢にかかわりなく、塾生一人ひとりの才能を大事にしたので、『小楠堂』の評判は高まりました。

\*四時軒…安政2年(1855)に沼山津(熊本市)につくられた

\*郷土…農村に昔から住んでいる武士や、農民で武士の待遇を受けている者



◆現在は駐車場になっている小楠堂跡  
(下通1丁目)



このコーナーは、菅 秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。